



リハビリテーション部



1. スタッフ

部長(兼教授) 宮本 健史
リハビリテーション専任医 4名
心大血管リハ専任医 5名
理学療法士(以下PT) 17名
作業療法士(以下OT) 6名
言語聴覚士(以下ST) 4名

2. 診療部の特徴、診療内容

リハビリテーション(以下リハと略す)部は、昭和42年に「機能訓練室」として発足し、その後「理学療法部」、さらに平成19年1月に、新中央診療棟への場所移転に伴い「リハビリテーション部」に名称変更された。障害を有する患者様に対して医学的リハの専門知識・技術を用い、自立した生活の獲得を目指している。医学的リハは病院機能の役割分担の観点から急性期リハ、回復期リハ、維持期リハに分けられるが、大学病院・特定機能病院である当院は、主に急性期リハの役割を担っている。令和5年4月現在、当部の疾患別リハでの施設基準は、脳血管疾患等リハⅠ、運動器リハⅠ、呼吸器リハⅠ、心大血管リハⅠ、がんリハ、廃用症候群リハであり、各種別算定には日数に上限が設けられている。

現在はリハ部長と専任医師9名(5名は心大血管リハ専任)、PT14名、OT5名、ST3名の計22名の療法士、看護師2名、クラーク1.5名体制で活動している。

3. リハ診療体制

リハ診察は、基本的に火・木・金の午前中であるが、急患の場合は、主治医から直接ご連絡があれば、診察日以外でも対応している。リハ担当医は診療・機能評価の後、担当療法士を決定し、リハ処方箋を作成している。その他、義肢装具の処方、義肢装具士が在院する診察日の午前中に行っている。身体障害者福祉法の15条指定医による身体障害者意見書・診断書も作成をしている(要予約)。また、リハ効果判定、リハ目標・訓練内容の検討のため、リハ医、看護師、療法士を含む多職種でリハ評価会議を毎週開催している。

リハは月～金までの完全予約制の個別療法(1単位20分)で実施している。担当療法士ならびに予約状況は、CIS上から確認できるようになっている。診察や検査などがリハの実施時間に重なる場合は、リハ実施前に連絡があれば相互の予定に合わせて時間変更が可能である。

手術後や治療による長期のリハ休止後のリハ再開時には、全身状態だけでなく機能障害、活動制限等に関する再評価のため、初診時と同様にコンサルトが必要である。MRSA等の感染症に対しても、感染対応時間帯(15:00～)を設けてリハ室でのリハをできるだけ行っている。

休日の臥床時間の短縮・ADLの拡大を目指す目的

で、毎週土曜日リハを実施している。また、大型連休、年末年始も新患を受け入れ、早期リハ開始を実現している。

4. 診療実績

○診療科別単位数の実績※図1

リハ対象疾患は多岐に渡り、全診療科よりリハの受け入れは可能である。リハ室での訓練が困難な患者はベッドサイドでもリハを実施している。

○職種別年間単位数の実績※図2

年度目標として、「各療法士1日当たりの単位数」や「年間総単位数」を定めている。令和5年度は産休・育休等の影響もあり、年間目標総単位数87,650に対し、実績は85,915であった。

○種別毎(各疾患別)リハ単位数と割合の実績※図3

令和5年度の各疾患別リハの割合は、がんリハ約32%、脳血管リハ約29%、運動器リハ約23%、心大血管リハ約9%、呼吸器リハ約6%、廃用症候群リハ1%未満であった。今後も質・量ともに高いリハの提供を目指した活動を行っていく。

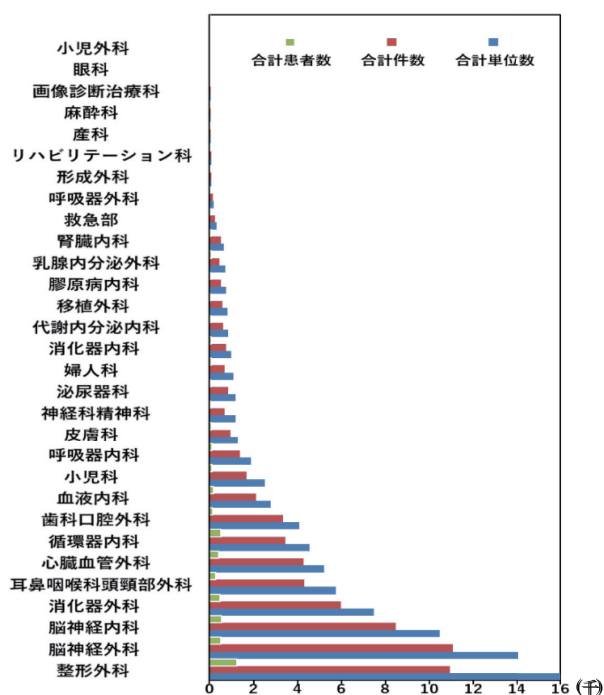


図1. 診療科別単位数

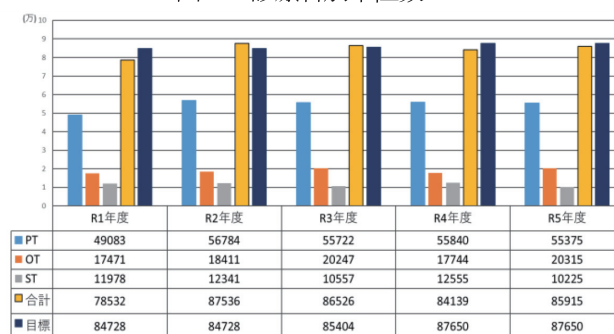


図2. 職種別年間単位数

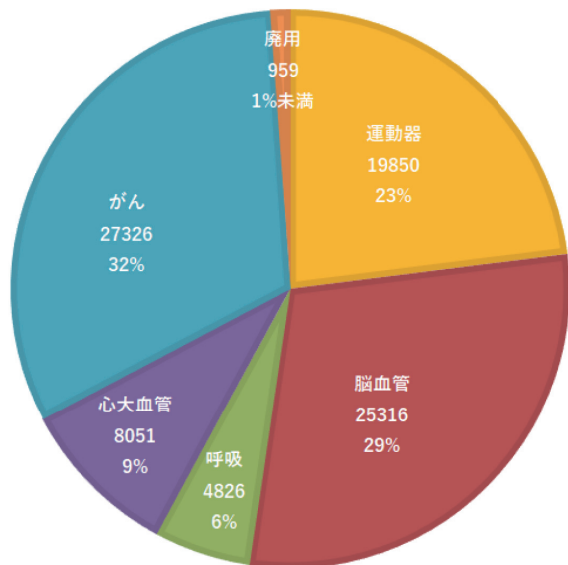


図3. 種別別単位数

5. 地域医療への貢献

当リハ部長が会長を務めている熊本リハビリテーション研究会は、毎回県内外から多くの発表者・参加者を迎え、リハ関連職種の研究発表・意見交換の場となっている。当部は事務局として特別講演の企画、抄録集作成などの運営を行っている。現在までに177回開催し、熊本県のリハビリテーションをはじめとする地域の医療の発展に広く貢献している。

6. 医療人教育の取組

当部はリハビリテーション医学会・研修施設の認定を受けており、リハビリテーション科専門医および臨床認定医の資格修得が可能となっている。療法士に関しては専門職の教育の場として、養成校からリハ学生の臨床実習を15名受け入れた。また、熊本大学医学部のポリクリやクリクラの受け入れも行っている。

当部は特に特定機能病院として、他院では経験出来ない稀な疾患や急性期におけるリスク管理などを学習できる場となっている。療法士が担当制をとり実習指導者として教育指導に当たっている。院内活動としては看護師や院内職員を対象に毎年数回のリハビリテーションセミナーを行っているが、令和5年度は、PTによる「糖尿病の運動療法～リハビリテーションの立場から～」を例年通り開催し、eラーニングにて「安全なトランスファー」「福祉用具に関するヒヤリ・ハット事例から学ぶ医療安全」「嚥下スクリーニングと食事支援」の3つの動画をあげ、リハの啓蒙を図った。また、OTによる子供見学デーを行った。セミナーの内容に関しては希望も受け付けている。

7. 研究活動

リハビリテーション部全体のスキルアップのため年度目標を定め、各自研究や学会発表、雑誌投稿等にも取り組んでいる。令和5年度学会発表（演題数）は日本リハビリテーション医学会（3）、九州手外科研究会（1）、日本肩関節学会学術集会（3）、日本心臓リハビリテーション学会学術集会（1）、日本心不全学会学術集会（1）、日本循環器学会学術集会（1）、日本循環器学会九州地方会（2）、日本てんかん外科学会・定位機能神経学会（1）、日本義肢装具学会学術大会（1）、日本摂食嚥下リハビリテーション学会（1）であった。その他、論文掲載（1）、英語論文掲載（7）などリハビリテーション専門医、及びセラピストは活動の場を広めている。さらに、「生体肝移植後の自立歩行獲得に関係する因子について」「心不全患者の社会的、身体的フレイルについて」「心不全患者の腸内環境と身体機能の関連について」「TAVIの早期離床、HADについて」「化学療法中の造血器腫瘍患者の身体活動量について」「上肢局所性ジストニアに対する装具療法とその効果について」など多岐にわたる分野にて研究を行っている。

リハビリテーションセミナーの様子



「糖尿病の運動療法」についてのセミナー



実際に学生が検査を体験している様子